



さらしなの里



第7号

「友の会」だより

2002・秋



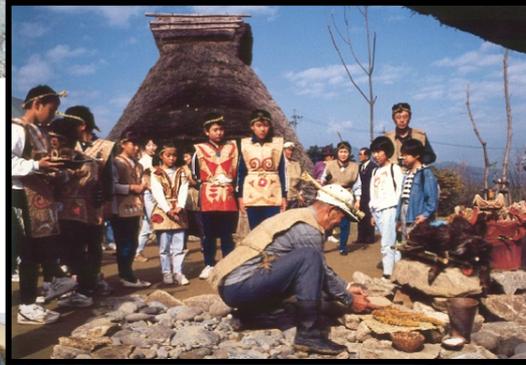
遊ぶ

祝う



収穫

支える



変身



縄文まつり10周年を迎えて

「十年一昔」という言葉がある。十年たれば時代が変わる、ということを目指して言うのだろうか、「さらしなの里友の会」は十年を先取りしていた。「友の会」発足から十年、「縄文まつり」も十回目を迎えた。顧みて友の会は、古代体験パークすなわち歴史資料館を中心に、戸倉町の行事に進んで協力する旨を会則に明示して始まった。

温故知新の諺のごとく、縄文時代の文化や生活様式を探求、創作部、文化部、環境部、女性部を立ち上げ、「豊穰への感謝」「古代食の復元」「土器の野焼き」など様々な企画を実践してきた。資料館境内の清掃、草取り、またまつりのために必要な食材の種まきから収穫まで自ら行ってきた。

結果、祭りは毎年、人の集まりを増し、小中学生らの健全育成に大いに資したと考える。原動力は善光寺平のパノラマを一望できる冠着山、それに続く坂、田畑、川という恵まれた風土に暮らしてきた更級の人たちの気持ちであろう。

(さらしなの里友の会会長・大谷秀志)

信頼深め 心交わした3日間

さらしなの里縄文まつり十周年を記念して八月十一日、アフリカのジャンベ太鼓

野外コンサートが

開かれました。世界的に有名なグ

ループの来演ということで、わが友の会でもこの機会に地域の子供た

ちにジャンベ

太鼓を教えて

もらうことにな

りました。

ジャンベ太

鼓とは打面が

二つある和太

鼓とは違い、

盃のような形

で打面は一つ

です。座って

叩くときと首

からぶら下げて叩くときがあり、

ドゥン・ティン・パンという三種類の

音の組み合わせでさまざまナリズ

ムを作り出します。精霊達と交信するた

めに生まれた楽器だそうです。

八日夕方、一行が到着、歓迎式典では、



子供たちがアフリカのジャンベ太鼓を演奏

食文化の交流として婦人会、生活改善、友の会のみなさまの協力で手打ちそば、お

やき作りに挑戦し、自作のそば、お

ママデイ・ケイタさん

やきを食べて「オイシイー」

「ウマァーイ」。楽しく和やかな

ひとときでした。

九日、子どもたちが太鼓

を習うワークショップの始ま

りです。更級小、戸上中の男

女計十四人。目の前にいるアフリ

カ人、初めて触れる太鼓、少し

戸惑っているようでした。リーダ

ーのママデイ・ケイタさんより太

鼓の話聞き、いよいよ練習で

す。

子供たちは脳みそが柔らかい

せいか、たちまち上達しました。言葉は通

じなくても、音は世界共通であることをあ

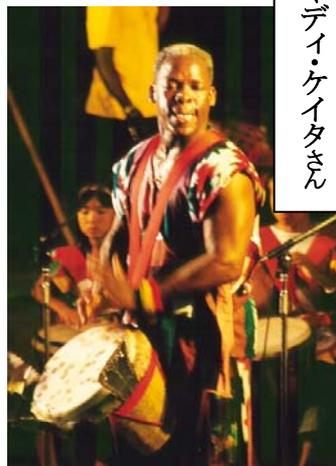
らためて感じた初日でした。

そして二日目。手のひらが痛いと言う

子、ママができた子、でも全員参加で昨日

の復習と新曲の練習。ママデイさんの子供たちに接する優しさ、教える厳しさとが全員のやる気を起こして盛り上がり、その響きが伝わってきました。

午後は一層熱気があふれ、



回りにいる

我々も音と

リズムの良

さに自然に

体が動いて

しまうほど

の上達ぶり。

真夏の夜、縄文まつり10周年記念

原語の歌詞入りの曲も含め五曲をマスターしました。信頼を深めて心と心の疎通を図っていくママデイさんの姿がとても印象的で、本当の教育のあり方を垣間見た気がしました。

「ワサ、ワサ(元気ですか)」「イエーイ」。ママデイさんの呼びかけにこたえ子供たちの演奏は大成功、最高のステージでした。迫力あるコンサートにみなが熱狂しました。

私も太鼓一台買ったところで役目は終わりです。次は子供たちに教えてもらう番です。
(塚田文夫)

松茸採りの極意と醍醐味

もく(コケ)の上から手のひらでそっと押し、思わず顔がほころぶ。手の下に三本、その隣にも。回りをた

んねんに調べ、丁寧に
とり始める。手の下に
松茸が隠れている。この
日の収穫ビク一杯、一番の大物
は七五〇㌔でした。

歩くの
にも気を使
います。何
年も同じ所
を歩いた足
跡、そこを
外れないよ
う慎重に
次の場所に
移動する。
これが松茸



もくの中から顔を出したマツタケ
(小山友一さん撮影)

採りのルール。松茸は素人には採れないといいますが、プロでも見えないものはなかなか採れません。

松茸の出る所をシロと言ひ、シロの寿命は三十年から四十年と言われています。

口にはそれぞれ癖があり、毎年十から十五
程ずつ移動します。赤松の根の先端にでき

シロの癖を知り 愛称つけて大切に

るようで、根の成長と一緒に動くんです。
ここでのシロの癖が分かれば見えないキノコ
でも採ることができます。

シロの少しの変化も見逃さないように、そしてシロを大事にすること。これが極意。松茸と出会って約四十年。先輩から歩き方から出る場所、尾根の名前などいろいろ教えてもらいました。

面白いのは、松茸の出

るところについている愛称。「炭焼き窪」「もくの島」「カジカごうろ」「夢の島」「じわれ」。昔つかまえた泥棒さんの名前などもあります。

それらを教わるのに四、五年。しかし、



愛犬と小山さん

絶対に教えない場所が何カ所あります。同じ尾根を歩いててもそっと姿を消してしまふ。だれにも教えない秘密の場所をみんなが持っているんですが、見つけて取ってしまったも知らん顔。それも大きな楽しみでした。

毎年仲間四、五人で財産区の松茸とりの権利を買い、採ったものは全部平等に分けるルールになっていたの、そんなことも許されたんです。冠着山の松茸は大きくて味もよくて、市場でいい値段で買い取ってくれました。ですから、自分のものになるのは残った虫食いがほとんど。

昭和五十年ごろまでは大分採れましたが、年々少なくなり、今は出るシロも数カ所だけ。数年先には冠着山から松茸が姿を消すかもしれません。山の手入れもしましたが、減る一方で残念です。

今年もその秋がやってきました。子どもや孫に「昔は松茸がたくさん採れたよ」と、昔話をする日が来ないことを祈りつつ夜寝床に入ります。目をつむると、山が松茸が浮かんできます。(小山友一)

おらほの冠着

⑦

山頂の冠着神社社殿の北側、古い杉の木立の中に、大きなブナの木がある。

幹回り二畝余、高さ十一畝の巨木である。ブナは温帯の落葉広葉樹で、水源涵養に好適な木として珍重される。

仙石の小松

明夫さんのお話では、この木に並んでもう一本、ブナの木があった。

今の木よりも一回り大きなものだったが、

戦後間もない昭和二十四年（一九四九）、八月三十一日来襲したキティ台風で倒れてしまったという。

その後、この倒木にキノコがたくさん生えた。しかし、だれも採らなかつたという。五年ほど前の新聞に、戸倉のどなたかが木島平村のカヤの平で、ブナの倒木にはえた



笠の直径約五十センチ、重さ三・五キロの巨大なハリタケの株を採つたという記事が載っていた。

倒れた冠着のブナにもそれと同じキノコがはえたのではないだろうか。採つて食べたかった。惜しいものだ。

キノコはともかく、こんな大きな木が二本もあつたというのに、児の木が周辺に見当たらないのは誠に残念至極。そもそも実

のならない木であろうか。土壌が悪いのか。でもそれならなぜこのような大木がここにあるのか。

近辺では大岡村の聖山、お種池のまわり、また坂井村の四阿屋山頂にもよいブナの天然林がある。冠着山にもなんとか、この木が増えてもらえぬかと思う。

財産区では六年ほど前、坊城平へブナ十本ばかり植え込み、毎年草刈りをして育てている。しかし、ブナはなかなか伸びない木で、育成には苦労しているということである。

（塚田哲男）

〈編集後記〉 縄文まつり十周年おめでとうございます。

今合のトップページは、これまでの十年を、事務局をずっと努めてくださっている「さらしなの里歴史資料館」学芸員の翠川泰弘さんに五枚の写真で、また「友の会」会長の大谷秀志さんに文章で振り返ってもらいました。

十周年特別記念企画として真夏の夜に催されたアフリカのジャンベ太鼓コンサート。あのリズムを自己流にアレンジして鼻歌にしている人も少なくないと思います。塚田文夫さんもそのお一人です。

マツタケ採りにまつわる興味深いお話は、女性部長の塚田志保子さんが、羽尾にお住まいの名人、小山友一さんにアタックした成果です。冠着山頂のブナは今秋もたくさん実を落としていました。あれだけあるのに…。なんとも不思議なことです。 （冠男）

さらしなの里友の会事務局

〒389-0812

長野県埴科郡戸倉町羽尾二四七の一

さらしなの里歴史資料館内

電話026(276)7511

FAX026(261)4161